

我が国の体育・スポーツに見られる教育言説に関する研究

鈴木 秀人

東京学芸大学教育学部 教授

本論文の出発点は、我が国における体育は、そこで掲げられている「主体的」とか「自主的」といった理想と、実際の現実の間にはギャップがあるという状況を改めて認識したところにある。勿論、そういった理想からの乖離は教育実践全般で、また社会生活一般の様々な場面でも見出しうるものであるが、特に体育において、どうしてその目指す在り方から乖離した状況が導かれるのかを考えてみると、過去の体育とのつながりがそれを説明する手がかりの一つになると思われた。

この過去とのつながりを、本論文では体育・スポーツに見られる教育言説に着目して考察した。それは、過去とつながりがあると考えられる実践は、そういった実践を過去に導いた言説と何らかの関係があるはずだからであり、また「主体的」「自主的」といった理想とギャップがある状況とは、運動を取り上げる教育である体育では「主体的・自主的であるべき」という、教育言説の支配下にあって見えてくる景色とも言えるからであった。

そこで本論文では、そういった状況の背景にある我が国の体育・スポーツをめぐる過去の教育言説が、どのようにつくられ、体育・スポーツの世界においてどのような力を持ったのかを明らかにすることを研究の目的とした。具体的には、体育授業における「教育技術法則化運動」が語った言説、運動部活動における体罰の起源を語った「軍隊起源説」、そしてチャンピオンシップスポーツにおける伝説的指導者が語った「根性論」をそれぞれ考察の対象として取り上げ、これらが言説として生成されていくプロセスと、そこでそれらの言説が発揮した機能を明らかにし、そのミクロな分析を踏まえた上で、それらの教育言説は「運動手段論」とどのような関係にあるのかというマクロな視点からの分析を行うことで、先行研究とは異なる視角から体育の過去とのつながりを描き出そうとした。

体育授業を検討の対象とした第Ⅰ章では、教育実践とは「何を目指して何を教えるべきか」という目標・内容の検討を踏まえてつくられるべきである」とする、広く支持されている教育実践研究の在り方を語る教育言説に対して、「教育技術法則化運動」が語る対抗言説がどのようにつくられたのかを検討した。

その結果、この教育運動のリーダーである向山洋一は、『とび箱をとばせられる』ことが教師の常識とならなかった実践・研究に「小さくない問題を感じ」、目標・内容を検討する体育授業論がなくても「とび箱は誰でもとばせられる」、言い換えると、そのような技術さえ明示することができないような「体育授業論は持たなくてもよい」という対抗言説をつくりだしたことが明らかにされた。

しかし、そのようにこれまでの体育授業論に訣別を宣言したはずの向山は、過去の体育授業論である「運動による教育」と重なる考えを自身の中で意識化していたことも明らかにされた。この点において向山の考えは、シーデントップが言う、これまでに既に存在した体育の一定の考え方を「暗黙の内に反映させている」ものと理解することができ、そこには、「それを利用する人間の思考や行動を無意識のうちに方向づけるようなある種の強制力をもっている」もので、「人はしばしばこの内在的な強制力やその作用に無関心であり、それをとくに意識しないまま受け入れてしまう」とされる言説の力がはっきりと示されていた。

運動部活動を検討の対象とした第Ⅱ章では、運動部の「体罰はなくすべきである」、運動部で「体罰はあってはならない」という、広く共有されている体罰否定の教育言説の根拠として語られ続ける「軍隊起源説」に注目し、その真偽を確かめながら、この言説はどのようなにつくられたのかを検討した。

その結果、この言説は公然と暴力を許した軍隊と、強くなるための猛練習と暴力が区別されない運動部という、それぞれに社会の成熟度が反映された独特の在り方が導かれることにより、暴力と親和性が高い日本のアナロジーの中に成立したものであること、それは旧軍隊の在り方が否定された戦後において、運動部の体罰を批判する論者達にとってその行為の問題性を強くアピールする上で有効な考え方として利用されるとともに、戦争に関わる責任を旧軍隊に押しつけて自分達を被害者に位置づけ、軍隊とは何ら関わりがないと自認する我が国の多くの人々が、自身を、批判の対象とされる運動部から切り離す上で効果的に機能する言説でもあったことが明らかにされた。

つまり「軍隊起源説」という言説は、我が国の多くの人々が戦争責任を考えることへ目が向かないのと同じく、運動部活動に見られる体罰の問題性について、私達が徹底的に考えることへと向かう芽を摘んでしまう力を持つものであり、その結果、強い運動部になるためには厳しい練習が不可欠で、そこには多少のしごきや体罰ぐらいはあるものだと思っている体罰に対する潜在的な支持を、私達の多くが心の奥深くで共有していることに気づく可能性を閉ざしながら、体罰を否定する言説であったはずの「軍隊起源説」は、体罰を運動部の中に残し続けることにおいて逆説的に機能してしまった可能性が指摘された。なぜならば、「軍隊起源説」が「語られ続ける」ということは、「強い運動部になるためには厳しい練習が不可欠で、そこには多少のしごきや体罰ぐらいはあるものだ」という、「人々の意識のなかで本音の部分として、隠微な力を保持している」教育言説が、「保存される」ことを導いていたと考えられたからである。

チャンピオンシップスポーツを検討の対象とした第Ⅲ章では、不合理で非科学的なスポーツの行い方の前提にあるとされることが少なくない「根性論」と呼ばれる言説に目を向け、その「根性論」を語った代表的人物とされる大松博文の「根性論」はどのようなにつくられたのかを、大松本人がその多大な影響を再三にわたって述べているにも拘わらず、これまで実質的に殆ど分析されていない大松の「戦争体験」に着目することによって検討した。

その結果、大松は自身の戦争における「経験」を、「勝てば官軍」「率先垂範」という信念

に思想化し、勝利することに絶対的な価値を置いた長時間に及ぶ激しい練習を先頭に立って行い、また大松の戦争経験の中で最も重たい意味を持っているビルマ戦線における「死の彷徨」の「経験」を思想化した「やればできる」「なせばなる」という信念は、「いかなる肉体的困難も精神力によって克服できる」として、技術や体力にもまして精神力を鍛えることを重視した彼の根性練習を導く核となった「戦争体験」であることが明らかにされた。

従って大松が語る「根性論」とは、死ぬことではなく生きることへと向かって「自分にうち勝つこと」であった彼の戦争経験を思想化した、信念としての「戦争体験」を表明した言説だったのであり、スポーツにおける根性論とは言説としては異なる性格のものであったことが理解された。そしてこのような戦争体験の持ち様は、この時期における「戦中派」のそれと共通するものであり、それがゆえに大松の「根性論」は、スポーツ関係者を越えたより多くの人々に「ひとつの人生における教訓」として広く支持される力を持ったのであった。

これらの3つのトピックスは、体育授業、運動部活動、そしてチャンピオンシップスポーツという異なる世界で展開されたものではあったが、そこに見られる教育言説の生成には、ある共通性を見出すことができた。それは、人間と運動との関係を、運動をすることが何かの役に立つという視点で一定の教育的な価値を想定するという、「運動手段論」の言説的な枠組みが共有されているということである。

例えば「法則化運動」が、既にある体育授業論を前提にしない立場を採ることを宣言したのにも拘わらず、過去の体育授業論である「運動による教育」という言説に暗黙の内に規定されたのは、跳び箱を跳ぶという運動に、例え無自覚であったとしても、技術の習得だけでなく、頑張ることや努力することを学ぶ可能性を見る前提があったからと言える。また、運動部活動における「体罰」の起源を語った「軍隊起源説」という言説も、そこで明らかにされた体罰の潜在的な支持が共有されるのは、体罰やしごきのような試練に耐えても、運動をすることには人間を成長させる可能性があるとする前提があるからと言えるだろう。「非人間的」とまで糾弾され、社会から逸脱した特異な行為のように批判されることもあった大松の実践も、その「根性論」が「戦中派」の人々が共有する「戦争体験」と共通していたからこそ賛同を得たのであるが、かかる「戦争体験」が有効であった時期を過ぎてもなお、大松の「根性論」が語られ続けるのは、スポーツでは勝利に向かって身体的にも精神的にも厳しい状況で頑張る貴重な経験ができる可能性を見る前提が、それを支えていると思われる。

本論文において、わが国の体育・スポーツに見られる特定の教育言説がどのようにつくられ、どのような力を持ったのかを明らかにしてみると、意図的であれ、意図せざる結果であれ、体育の過去とつながりながら、「運動手段論」の正統化へ向けて体育・スポーツに関わる教育言説の生成が成されていたというのが結論である。言うまでもなく「運動手段論」は、その運動を行う人間にとっての運動それ自体が目的になってはいないから、本論文の出発点となっている「主体的」「自主的」といった理想とギャップがある現実を必然的に導くことになるのである。